
ポー姫とリト星～七夕にささぐ～

しろめのくろねこ

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

ポー姫とリト星～七夕にわたべ～

【ZPDF】

Z4294M

【作者名】

じゅりめのぐるね

【あらすじ】

ポーランド（織り姫もじき）がリトアニア（彦星もじき）を探すために姫国のいちやいちやに負けずにがんばるお話

ソノイチ（前書き）

七夕ですね。

七夕の前にあざかるとか書いたくせに既にになってしまった下さいません。

リトポです

ポーランドヒスウェーテンの口癖が上手く真似られてるか不安です
が（笑）

天の川が厚い雲の向こうにあるあります今夜、せめて小説の中で満天の星空を感じて、ポーランドのじたばたぶりを楽しんで頂ければ幸いです

では畳し上がれ

「今日は何の日かもちろんしつてるよな?」

ヨンスが目を輝かして言ったのが今日の小さな事件の始まりで

「知らんしー」

ボーはキムチチゲをむぐむぐしながら答える

ちなみにキムチチゲはヨンスの陰謀によりキムチの割合が通常の五割増しだ

みるからに辛そうな真っ赤な色

汗だくだぜー? うとこよこよするヨンスに、うわせこしーと半眼で睨む

「今日は七夕の日なんだぜ」

「タナバタ？」

「オレが起源のいかした祭だぜえ！！」

マンヤー つとひょこひょこジャンプしながら嬉しそうに笑う

三

はふつ、はふつ

もぐもぐ

「じくん

ポーの無反応をとこつたら…

「わやんと聞くんだぜーーーー！」

むつせーー

” ぐるん ” をビンビンにしながら怒るコソス

ポーは最後の一 口を食べ切り
口を拭いて一言。

「てかキムチチゲ美味くね？」

「だよなーーーーじゃなくオレの話を聞けなんだぜーーーー！」

「コソス いまの顔なにそれ まじウケるしーーー！」

…一人は似た者同士のようです

若いから落ち着きがないところなんてとくに

若さゆえですかね、ええ。

- - 10分後

「おれヤバくない?」

「なかなか似合つてるんだぜー」

ポーはまことなりでもなさそうに長い裾を掴んでその場をぐるりと一周した

ポーがいま着衣しているのはヨンスのこの七夕祭の「スチューム」である織り姫の衣装だ

床に付くほどたつぱりとした一枚布を何枚か重ねていて、その上に透かしの入った薄桃色の布がふんわりとかかっている

天女の羽衣がイメージなのだ、とヨンスは得意そうに笑った

「あ、ちょっと待つんだぜ」

ヨンスはポーのそりそりな金髪をお団子にして左右にすべり星の付いた簪を飾る

「おれ鬼かわいくね?」

「…予想外」

姿見に全体をうつしてポーは「満悦だ

色白小柄なポーに織り姫の衣装は恐ろしくよく似合つた

女装して似合わなかつたらポーを笑つてやううと意氣込んでいたヨンスは若干ナーバスだ！！

「俺まじかわーし。なあヨンス、これソトにみせてきてもいいだ
う?」

「すきにすみといこんだぜ……」

ヨンスはぐるんをフーヤフーヤにわむかて体育座りだ

対象的にポーは鼻歌を歌いながら「満悦で帰り支度を始める

「あ、そーだ。」

玄関まで来てポーは面倒くわざに振り返つた

「なんなんだぜ?」

ヨンスはキムチチゲを食べていつもの無駄な元氣を取り戻しかけて
いた

「七夕つてさあ……………中国ひとの祭じゃね?」

ばたん

『ノンスは一瞬田が点になつたがはつとして叫んだ

「お…俺は世界の起源なんだぜー————」

『ノンスの声は空しく無人の玄関に響いた

「コトー

「つわあつ

ポーが勢いよく扉を開けると眉毛…もといイギリスが飛び上がりつてお茶をひっくり返した

「な、なんだよポーランド、いきなり驚かせやがって」

「コトがここにこるつて聞いたしー」

ポーはあきょきょりとあたりをみまわし、クッシュョンを裏返して、"リトー"と呼びかけている

「ああ、さつさまでいたな」

ポーはくるりと振り返りむくろへれる

「わいきまで?」

「会議の連絡に訂正があるってこいつてわざわざ来てくれたんだ」

あいつはほんとに気が利くからなあ、トイギリスはスコーンをぱくつきながらぼやく

「ホワッショ、なんの謔がだい」

「げ、アルフレッド」

「なんだ起きたのか」

だばだばなパークにこれまただばだばなズボン姿のアルフレッドが目を擦りながらやってきた

眼鏡をしていない

なんだか新鮮だ

「やあポーランド、すいへん可憐な衣装だな」

「わいこいえば確かに」

アルフレッドトイギリスは興味津々にポーをみつめる

「あんま見んなし」

ポーはなんとなく照れ臭くなつてソファの影にかくれる

そんな様子も逆効果(?)で可愛いのだがポーは気づかない

「あ…ササ…だ?」

ポーは隠れるまでは見えなかつた角度に大きな笠があるのをみつけた

しかしポーは言つ終わる前に首を傾げる

ササにしては赤や黄色や青や紫の葉っぱがいっぱいある

「これはなんだし」

「これは短冊つて言ひひじいな」

イギリスは得意げに七夕には短冊に願い事を書いてつるすと願いが叶つところと言ふ伝えがあるんだ、といった

「わわわンスが言つてたことそのままだね」

「…ウルサー」

アルフレッドは軽快に笑つと眼鏡をかけてポーを笠の元に手招きした

「これに願いをかくのか」

「やうなんだぞ」

ポーは一番近くにあつた桃色の短冊を裏返す

”ヒーローとして世界の平和を守りますよ！”

「…」

無言でめぐり治す

”アイスクリームをお腹いっぱいいたべられますよ！”

”ピンチの時は大活躍して女の子たちにもてますよ！”

「どうかなつ」

「…」れ何枚あるんだし

「139枚さ」

「わあ」

ポーは可哀相なものをみる眼差しでアルフレッドをみた

視線を言語になおすなら

”てめーは小学生か”、つてとこでしようかねえ…

「なんだイギリス、君は何も書かなかつたのかい？」

「お前みたいに不確かな星に頼むことなんてねーからな」

「相変わらず硬いなあ、君は」
「ほっとけ」

ポーは一人の会話を聞き流して短冊を裏返し続けていたが、ふと空色の短冊が目にに入った

一つだけこやに奥のほうにあつたからだ

まるで見つからないように隠してこるかのよつた

「あ。やっぱ筆跡が違つ」

「あ、また、それ……」

イギリスは何故か慌てだす

ポーはにせりとわらつた

素早くそれを筐から外すと書いてある」とを大きく読み上げる

「”アルフレッドヒュットと一緒にられますよつこ”

「うあああああ！一読むなよばかあー／＼／＼／＼

イギリスは机に突つ伏して唸つてこる

「…お前星になんか頼らないんだつたんじゃねーの？」

ポーはあほらしさに呆れ、つたつたまま冷ややかな目でその様子

を傍観している

「イギリス、ほんとに君は馬鹿なのかい？」

数瞬呆気にとられていたアルフレッドだが、肩をすくめてイギリスの頭を撫でる

イギリスは頭を左右にふって”違う、違うんだ。これはナーニカの手違いで……”と顔をあげようともしない

ちなみに耳まで真っ赤である

「まじり、顔みせて」

抵抗するイギリス

ため息を一つつくと

アルフレッドは一矢りと嘲った

「う、うわあ！？」

アルフレッドはたやすくイギリスをお姫様抱っこで抱え上げた

「星が頼りないっていうなら

イギリスの耳に自分の口を寄せ
顔を近づけてウインクをする

「うそなんだってことか、オレに直接言はせないんだぞーー！」

予想外だったのだろうか。
顔を埋めてぱちぱちと隠せした

そして

「ああ、うん……／＼そうだな。今度からせめてあるよ」

イギリスはアルフレッドの胸に顔を埋めてくすぐったむかに笑った

「あのー、俺帰る」

ポーは死んだ魚の田をしてくる

「あれポーランドまだいたんだな。帰ったかと思つた」

「じりじりみんなよ、ばかあ」

見せつけてんじやんかよ

ポーは心の中で毒づいた

「やつこえぱリトニアはスカホーランのところに行へつてこつてたな」

「行つてゐるし。じゃ」

ボーはげんなりしながらイギリスの家を出た

そして振り返らずアラを睨みチチ類を躊躇はめた

「……たまごの魔術」

……あらあら何考へてるのか、ね

.....

「...」

「あ、ポーランドさん」

1

寒さの厳しい地域の特徴なのだろうか、重厚な木のドアをくぐると室内の温かい空気がながれ込んできた

「可愛い格好ですね」

「はい。ひとつでも似合います。ねえ、スーさん」

「なんだな、めんげえ」

「フィンの母の母の母の空氣にやられ一瞬ここに来た目的を忘れてしまつたポーだったが

「つて、違つし。コートーリーはほんのこるだい?」

「コートアーリーさんならつこわつかえりになつましたよ」

「…まじで」

話によればリートはポーがフィンからずっと借り放しだった漫画を返しに来たのだそうだ

ほんとこ…リートは嫁ですね
げふんつ

「あーそーいえば。ずっと借りて悪かつたしー。あれすっげメール
ヘンな話だったよな」

お田めばっぱりの金髪縦ロールの主人公の女の子が眠つてゐる間に木馬にのせられ、ぬいぐるみの世界に連れていかれてしまつといつても斬新（？）なストーリーを思い出す

「わつですね」

フィンは意味ありげな田線をスウヒーテンに送る

スウヒーテンは田をそらす

フィンは楽しそうに笑つて言った

「実はこれスーさんのなんですよ、ねつ」

「……なにばらしてんだ」

「はあああっ！？？」

この日の前の体格の良い北欧の暴れ者のスウェーデンが両手で少女漫画もち、はらはらと涙を流しながら読む姿を想像する

想像して

想像して。

吹いた

「……ぶははーーお前そんなでかぶつなのにメルヘンつ

「スーさん可愛いいい物好きですもんねー」

あはははと笑う一人の背後に、スウェーデンの影が迫る

「静かにすんだ」

「ひょあつ」「なんだしーー?」

少し不機嫌そうな（多分きつと照れてる）顔でスウェーデンが一人を抱え上げた

「うわあ、高いつ」

「何すんだしーー?」

「…」

スウェーデンは一人を凄い勢いで凝視する

怯え、だまる一人。

そして

一人を抱きよせまま頬づりした

「…めんげえ」

「つ？くすぐつたいですつーー!」

「離せえーーー!」

「おめだちほんとにめんげえ」

「わよ、話こですか」

「タンゾー、スウヒー、テノー、タンゾウヒー、、、、わやねー、」

30分後

「…。（ポーが現世に回帰しふりと立ち上がる）」

「どうした

「…。（指で玄関を指差す）」

「帰るだか」

「ボーグー領く」

（2k¹⁰⁰は寝せたアインが眩しそうに手を振る）

「また」こと

「……（ポー頭をぶんぶんと横にふる。若干涙目でスウェーデン宅から転げるように行く）」

「うーん、この空白の30分間に何があつたのか

「…スーさん」

「ん」

フィンは大きく息を吐き出してから「ん」とスウェーデンの肩に頭を預ける

「今日は七夕らしいです」

「んだか」

「スーさんだつたら何をお願いしますか

「そだな…」

スウェーデンは少し思案した後にフィンの肩に手を回して顔をフィンのふわふわの髪に埋める

「おめどおりといれるような、がな」

ふふ、とフィンは小さく笑つてスウェーデンの首に腕をまわす

「じゃあ僕と同じですね」

「んだが」

「はー」

「あれ？ めでたしめでたし（笑）

……

つてそういうかない

主人公は金髪織り姫なポーであることを思い出さう。

「コトー」

「ポーランドさん」

着物姿の菊は声に振り返り、柔らかい笑みを浮かべた

「コトニアニアさんならつこわしあ行つてしまこましたよ」

「…………もうやだしー」

「ポ、ポーランドさんつ？」

ぐすんと鼻を鳴らしポーは遂に涙をこぼした

「どうしたのです？」

菊はぐずつゝポーを縁側に座らせて訳を聞く

「俺は……リト、にこの格好をみて欲しかったつ、だけつ、だしつ。
なつ、」

「見つからぬのですね」

「リトのばか」

膨れたポーは縁側の縁を握つたり離したり足を投げ出してぶらぶら
させたりとせわしない

そんなポーを菊は孫を見守るように優しい眼差しをしている

「ポーランドさん、今日は七夕ですよね」

「知つてゐし」

「織り姫と彦星は必ず出会えます。二人の間にどんなに大きな川が
あつたつて、どんなに邪魔が入つたつて、二人は必ず惹かれ合つ

ポーはいつの間にか泣き止み、真剣な眼差しで菊を見る

「さあ、これを

「これ」

菊はすっと懐から短冊をだした

真っ赤な短冊をみてボーは無償に泣きたくなつた

「どうすればいいんだし」

「短冊に願いをかけてみてはどうですか、仮にも今ポーランドさんは織り姫様なのですから」

菊はそうこうとこうりと笑った

暮れはじめた空に一番星が輝く

ポーランドは妙に素直な気分になつて慣れない筆で短冊に願いをこめる

”つとにあえますよ”

菊は優しく頷くとポーの短冊を庭にあつた竹の一一番高い所に飾つてくれた

「ありがと菊。お前超いい奴だな」

「いいえ当然な事をしたまでですよ」

ポーが清々しい気持ちでリト探しのために歩きだそうとする、菊はその肩を掴む

「ボーリング場へ必ずコートマーケットへ寄りますよ、絶対」

「…? なんでそんなに言い切れるんだし?」

「だつて」

菊は満面の笑みを浮かべる

「コトローラーはなぜ血弾に疊ると血つてこまつたから」

「…………そ、それを早くいえしいいいい！――――――」

「うわうわ」と黒笑する菊にポーはむくれつづけ出した

ふう。

ため息をつく菊

「ええ、でもほんとに

菊はひざ元にいたポチくんを抱き上げて大分暗くなつた空を見上げる

運のいいことに今日は例年になくはつきりと天の川が見えた

「一人が楽しい時を過ぐせますよつこ」

やつぱりなんだかんだ言つても菊はいい人なのです

ポーは返事もせずにコートで直行する

「今日の夕食は……ひひゅあ……？」

「コートのばか」

ポーはエプロン姿のコートで後ろからしがみついて

「ポー? どうしたの? その格好」

「なんで」

「……ポー」

「う……うわん」

「わああ、どうしたの」

「コートのばか……！」

リトはなんとか振り返り、ポーに田線を合わせる

「なんで?、織り姫がつ、会にいくためにがんばってたんだしつ」

「うん」

リトは事情はわからないがポーの田をみながら優しく金髪を指で梳く

不思議だ

それだけでポーは涙がぴたりと止まってしまったのだから

「コトが悪いし」

「うそ、『めん』

「もうどうか行くな」

「うそ。『じ』にも行かないよ」

その答えを聞いて安心したのかポーはおでこをコトにべつけて上
目遣いでいった

「コト。好きだしー?」

「……はーはー。俺も好きだよ」

リトは皿を叩わせることなく口覃に叩つてそっぽを向いてしまった

「なに照れてんだし」

「照れてないよ」

「照れてる」

「いのちがこいつ」

リトのお家の空にも満天の星と天の川があつた

巡り会えた一人のために

苦笑いした神様が

” しようがないなあ ” と呟いて

一つ、流れ星を流した

- - - - - Fin - - - - -

どうでしたか？

リトマニア登場短かっ！－！

つてシシ ロミはおにとこへ…

笹に短冊を吊して夢を描く

そんな日々は遠い昔に過ぎ去ってしまいました

皆さんは今夜願いが叶うなり

どんな願いを笹の葉に托すでしょうか？

さて。ヘタリア小説をだいぶ書いてきましたがどうですかね。

このカップル、このシチュで小説を書いて欲しい、といい要望があればやってみたいとも思っています

では、また。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n4294m/>

ポー姫とリト星～七夕にささぐ～

2010年10月9日19時35分発行